

かごしまルネッサンスアカデミーから地域再生 NPO 活動へ

ー 特定非営利活動法人かごしまルネッサンスの設立から今日まで ー

NPO 法人かごしまルネッサンス 理事長 猪飼 修・副理事 河野イク・理事 岩川直浩・理事 野村裕子・事務長 野村 卓

1 かごしまルネッサンスアカデミーから地域再生 NPO の設立

NPO かごしまルネッサンスは、鹿児島大学かごしまルネッサンスアカデミー健康・環境・文化コースの地域再生に関するプロジェクト研究（第2期のグループ対応以降）の経験を通して、修了後も活動を継続させるために設立されたのが始まりである。

それ以前には修了生の団体として同窓会が設立されていた。しかし、これはあくまで親睦団体であり、同窓会に事業部門を設置することを検討したが、実現には至らなかった。そこで、有志によってかごしまルネッサンスアカデミー第3期の修了前に NPO 団体設立に向けた検討が行われ、第3期生修了式当日の平成21年9月26日に設立総会が実施されるに至った。この時、修了生とともにかごしまルネッサンスアカデミーに所属する実務教員や研究支援者が役員に加わり、事業運営体制が整えられることになった。その後、鹿児島県に NPO の申請を行い、平成22年3月18日に認証を受けることになった。これは大学の地域貢献において、同等の連携先を生み出している成果として評価することができる。

なぜなら、同窓会はその性質上、親睦団体として従属的な団体であるが、NPO は法人として大学法人と同等である。そのような団体を産み出し、連携先として支援できるようにすることは、主体的で自立的な市民の養成は、大学の地域貢献の重要な要素になる。NPO ともなれば、客体的、受動的に大学の支援を待つわけにはいかない。

また、NPO は趣旨に賛同する市民に開かれている必要がある。同窓会が修了生によって構成されるのと最も違う点である。

鹿児島大学のかごしまルネッサンスアカデミー事業が終了した5期段階には、食の安全管理コースや経営管理コースの修了生にも賛同者が広がり、40名を超える会員を確保し、中には一般の市民の会員も存在するまでに至っている。

このように、大学に対して自立的な活動を行ない、かつ目的を共有できる市民に開かれた団体として、設立目的お

よび事業（業務）がはっきりしていなければならない。このため、NPO かごしまルネッサンスは、鹿児島県民に対して、鹿児島の健康、環境、文化に関する事業を通して、鹿児島の地域再生に寄与することを目的とし、以下の3つの特定非営利活動を行っている。

- (1) まちづくりの推進を図る活動
- (2) 社会教育の推進を図る活動
- (3) 環境の保全を図る活動

この目的を達成するために、以下の4つの事業を行っている。

- (1) 鹿児島の観光とまちづくりを連結させた事業
- (2) 鹿児島の文化継承と地域再生を連結させた事業
- (3) 鹿児島の社会環境（食育・食農の領域における伝統的な食の継承や農の理解など）と地域再生を連結させた事業
- (4) 鹿児島の自然環境の保全と地域再生を連結させた事業

これらの事業の枠組みの中で、特徴的な事業例を3つほど紹介したいと思う。

2 特定非営利活動法人かごしまルネッサンスの活動

(1) 桜島大根プロジェクト

この事業は、健康・環境・文化コース2期修了生5名（猪飼・河野・地福・吉国・吉国あかね（旧姓：川原））で構成された「さつま Food'n5」の活動が母体となっている。一年間ルネアカ（ルネッサンスアカデミーの略称）で学んでいくうちに、かごしまの食べ物について何か出来ないかと話し合い鹿児島の食材の中でもその大きさではギネスにも載っている桜島大根に目を向けてみることにした。最近では鹿児島の家庭も核家族化し、食材としては大きすぎ、その料理方法が伝承されなくなり、旬の時期でも食べることも少なくなった。また桜島大根を観ることも自体も少なくなっている。そこで鹿児島の家庭に取り戻す活動として「桜島大根を我が家の食卓へ」をスローガンとした。



まず、我々が始めたのは桜島大根を知ることであった。桜島大根は平成17年に農林水産省の故郷に残したい食材100選に選ばれ、平成20年には鹿児島県伝統野菜にも選ばれました。蕪と大根の違い、桜島島内で栽培された桜島大根(ほんじま)島外で栽培された物(いなかじま)という様に区別されていたことも分かった。

また、鹿児島市内の2校の小学生にアンケート調査を実施したところ、写真で見たり名前だけは知っているが実物を見たことがないという意見や、食べたこともないという児童が多いことが判明した。

更に、桜島の農家の方に聞いてみると20数年前の桜島の降灰がひどかった頃から栽培農家が減少し、自家消費程度の栽培に転換する人が多くなり、生産農家は安定した収入を得る為に漬け物用として出荷するようになったことも判明した。このため、旬の時期にほんじま産の桜島大根が店頭に並ぶことが少なくなり、見かけなくなったと考えられた。

そこでまず、ほんじま産といなかじま産を比較検討する為、自分たちで栽培する事にした。また、せっかく桜島大根を栽培するなら農作業の持つ親和力で最近希薄になりがちな家族の絆を深める機能にも注目することにし、小学生の親子を対象に『桜島大根体験農園』に取り組むことにした。



最初に取り組んだことは、桜島の耕作放棄地を借り受け、開墾することであった。地元桜島大根生産農家の村山利清氏に指導を頂きながらスタートした。整地・種まき・追肥・間引き(3回)・畝作り・追肥と農作業に取り組み収穫までこぎ着けることができた。栽培は、できるだけ環境に負荷をかけない様、有機・減化学肥料栽培に近い方法で取り組むこととし、化学農薬を使わず忌避剤(インド梅檀の実を熟成)を使うのみとしたが、大根の初期生育期に栄養が集中的に必要なため、ぼかし肥料の利用では不足することから、化学肥料を投入せざるを得ないと判断した。

このようにして栽培管理して収穫した桜島大根(ほんじま)を使って、調理担当メンバーの地福によって料理教室(間引きの時期には間引き菜を使っての料理講習会)を開催した。また、平成21年にはJR九州新幹線開業イベントに参加し、平成22年には大阪において鹿児島の食材をアピールする事業が実施され、我々の桜島大根を提供した。この他、平成23年には鹿児島県主催焼酎企画「My Shochu Style」にも参加した。

現在、鹿児島市内の創作料理店、おでん屋、わっぱ飯店などに、食材として無料提供を行い、旬の桜島大根(ほんじま)を使った料理を通じて少しでも消費拡大に貢献できればと考えています。

また、活動の成果として収穫した桜島大根(ほんじま)を持参し、鹿児島大学の吉田学長への表敬訪問も実現した。



この活動の成果として、食材としての魅力を再確認するばかりでなく、家族の絆を再確認して復縁した夫婦が出たり、我々のメンバーの中でもカップルが誕生し、夫婦になるという成果をあげることができた。この夫妻は有機野菜販売所「そよかぜファーム」を開業し、現在は地域の生活の拠点として、様々な活動を行うようになっている。

2012年9月には、5回目の桜島島内での桜島大根栽培体

験事業がスタートします。来年の収穫時にはギネス挑戦出来るくらいの物が獲れるように取り組んでいきたいと思っている。

鹿児島大学 かごしまルネッサンスアカデミー「健康・環境・文化コース」での学びから実践へと繋がっていった事を感謝し、これからは鹿児島の伝統野菜である桜島大根が旬の時期に我が家の食卓へ上がるようになることを目指して、今後も活動を続けていきたいと思う。

(2)自転車プロジェクト

この事業は、健康・環境・文化コース4期生を中心に取り組みがスタートした事業である。受講時の研究のテーマは、「旧谷山街道を活用して自転車シェア道路の可能性を研究する」-旧谷山街道を自転車共有エコ街道への提案-とした。



記事 南日本新聞 2010年7月掲載

このとき、自動車ではなく、自転車で、鹿児島の街をゆっくり楽しみながら人にも環境にもやさしく、健康的な生活をしたという要望があることが確認できた。

同時に、息の長い活動が求められることが判明した。そこで、中心メンバーであった岩川、山中、川口らは第4期を修了後に、かごしまルネッサンスアカデミーの第5期生として継続受講することにした。

第5期での研究のテーマとしては、「自転車と共生するまちづくり」とし、自転車マナーアップイベントの発展の可能性を検討することにした。

イベントでは、自転車走行時の注意点やハンドサインなどのルールを学びながら、春祭大ハンヤキャラバン隊としてメイン会場を目指すことを商工会議所と共同実施した。自転車通勤を始めるための路上走行レクチャーも同時に開催した。北会場甲突川河川沿い道路を走り、南会場は旧谷山街道を活用する南北自転車ネットワークの実証を行った。

その後も活動を継続し、2012年には鹿児島シティサイクル 2012in かごしま春祭りに実行委員として参画した。

ハンヤサイクルイベント実行委員会のメンバーは、商工会議所かごしま春祭振興会実行委員長 河井 達志(宇宿商店街振興組合理事)、全日本交通安全協会 自転車安全教育特別指導員 中島修(自転車商連絡会会長)、NPO かごしまルネッサンス自転車推進プロジェクト代表 山中岩川であった。

イベントは、平成24年4月22日(日)開催、前年と同様に自転車キャラバン隊として、市内約10kmを周遊する安全走行イベントを実施し、「自転車はどこを走ればいいのか?」などを学ぶ安全走行レクチャーも開催した。



また、このイベントでは鹿児島大学のサイクリング部の協力も得て、南日本新聞女性記者や小学生12歳から71歳の高齢者まで22人が参加し、自転車安全指導員の中島さんにキープレフトなどについて指導を受けながら、実践が行われた。

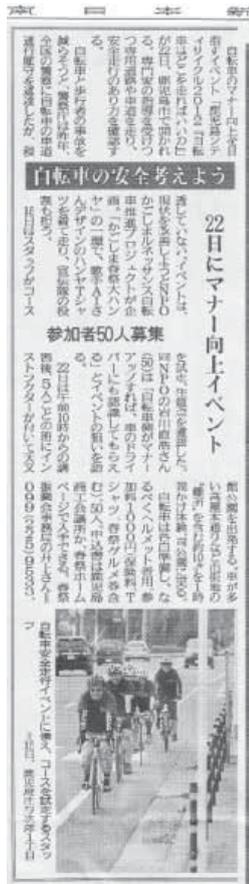
南日本新聞に掲載された記事には、自転車はクルマの仲間(軽車両)であり、走るべきは車道であるということ。でも実際に車道に出るとどう走ればいいのか等について、車道を走る際の作法と現実的な危険回避術を学ぶ必要があると指摘する掲載がなされた。このイベントは事故を未然に防ぎ、加害者にならないために自転車乗りのマナー向上を目指す実践的な走行レクチャーとなった。



記事 南日本新聞 2011年6月27日掲載



記事 南日本新聞 2012年5月11日掲載



記事 南日本新聞 2012年4月16日掲載

(3)きもndeさるくプロジェクト

この事業は、健康・環境・文化コース第5期生が中心となりながらも、健康・環境・文化コース第3期生、第4期生と連携して行われてきた事業である。

本事業を実施する背景は、現代のさつまおごじょ（鹿児島の女性）が、日常において着物を着る機会が少なくなったことである。その一方で、着付け教室や着物を着てのイベントは多く宣伝され、その多くが商売と直結しているものである。織物業による経済行為を背景とした文化継承の側面を認めながらも、経済行為中心ではなく、日常に着物生活を取り戻す場をどうすれば回復できるか。また、着物を通して多世代との交流の場を確保し、街歩きをする。その結果として鹿児島の歴史や文化を共に学び、共有することで、着物と地域が一体となった文化継承に活動が活かされるのではないか。この時代・この地域に共に生きているということ（互助）を再認識できるのではないかと考えた。2010年3月からスタートし、2012年3月には6回目を企画・運営してきた。

主に働く女性層を対象にした“きもんでさるく”の文化活動から、鹿児島県民がもう一度、地元の歴史・文化を共に学びながら着物を着ることを楽しむことが、地域や自分のためになる。また、着物や大島紬のような伝統工芸品が、

この時代、この地域に共に生きているということに気づきと学びを与えてくれる。そして、生活を取り戻すイベントの中から、日本の伝統の継承に繋がると実感させてくれる。このような活動を、どうすれば継続し、持続できるかが大きな課題である。

そこでこれまでの活動内容を振り返ることにしたい。

第1弾 さつまおごじょきもんでさるく

2010年3月28日実施

NPO かがしま案内人と連携

天文館及びその周辺の街歩き

参加者 8名

第2弾 さつまおごじょきもんでさるく

2010年7月16日実施

NPO かがしま案内人と連携

6月燈・照国神社周辺の街歩き

参加者 10名

第3弾 さつまおごじょきもんでさるく

2010年11月23日実施

NPO かがしま案内人、本場大島紬織物協同組合と連携

尚古集成館（仙巖園）の散策

参加者 16名

第4弾 さつまおごじょきもんでさるく

2011年3月27日実施

NPO かがしま案内人、鹿児島県民教育文化研究所と連携

上町周辺の街歩き及び鹿児島県民教育文化研究所の見学

参加者 13名

第5弾 さつまおごじょきもんでさるく

2011年11月6日実施

NPO かがしま案内人と連携

観光ボランティアガイドの案内により市電でまち巡り

参加者 10名

第6弾 さつまおごじょきもんでさるく

2012年3月25日実施

NPO かがしま案内人、本場大島紬織物協同組合と連携

納屋馬場の街歩き

参加者 14名

参加者の呼びかけについては、ソーシャルネットワークのコミュニティ内での呼びかけを中心とし、チラシを作成して連携するNPO かがしま案内人のサロンに配置したり、NPO かがしまルネッサンス会員にメールで周知することによって確保した。また、友人や知り合いにも声をかけた。

参加者には、当日の様子をまとめた記録集と写真を収めたCD-Rを送付し、次回への参加を促すよう配慮している。

連携を図っているNPO かがしま案内人は、NPO かがしまルネッサンスの団体顧問に就任して頂いており、本事業の企画（街歩き）の相談役、当日の街歩き案内役、着付けに関する協力を頂いている。更に、チラシの配置、参加者への呼びかけも積極的に協力してもらっている。

本場大島紬織物協同組合には、組合員を通して本場大島紬の着物一式を参加者に貸出してもらい、本場大島紬の日常への取り戻し活動に協力頂いている。



第3弾のきもんでさるくの様子



第5弾のきもんでさるくの様子

3 今後の活動の展望と課題

鹿児島大学の地域貢献の一環として焼酎を始めとする伝統食や地域経営、健康・環境・文化に関する幅広い領域をカバーするように始まったかごしまルネッサンスアカデミーも5年間の事業期間を終え、現在は大学独自事業として新かごしまルネッサンスアカデミー期に入っている。かごしまルネッサンスアカデミー修了生として、NPO かごしまルネッサンス会員として、そして鹿児島を愛し、鹿児島の地域再生を実践する者として、鹿児島大学が事業を継続して頂いていることに関して、感謝申し上げたい。

そして、我々NPO かごしまルネッサンスの会員は、鹿児島の地域再生の課題は、社会的、経済的、文化的、環境的にも根本的で息の長い事業展開の中でしか解決できないものであると認識している。

改めて鹿児島大学との連携を前提にしつつ、我々が自立的で持続可能な事業展開をしなければならない使命を有していることを自覚しなければならない。

鹿児島大学独自事業となったかごしまルネッサンスアカデミーとの連携は、NPO かごしまルネッサンスにとっても会員の確保とともに、修了生にとっても心と活動の拠り所である。鹿児島大学との連携を基点として、NPO が一般の鹿児島県民を巻き込んだ学びの事業展開を発展させていきたい。

改めてNPOは単なる親睦団体ではない。持続可能な鹿児島の構築のために、公平・公正で、豊かな絆を形成する責任を有している。

そのためには財政基盤の強化が求められることを自覚している。しかし、未だに事業展開には手弁当感が強く、これは会員の使命感や絆によって維持されている側面を認めねばならない。会員間の関係性が壊れれば、事業展開が停滞する可能性が常にある。

しかし、現在のところ補助金や寄付によって専従者を配置し、事業拡大することは当面考えていない。事業の拡大にばかり目を向けず、どうすれば身の丈にあった持続的な活動ができるかを模索する予定である。

その一方で、会員も鹿児島県外に広がり、それぞれの地域での再生事業の展開が模索されなければならないと考えている。

地域再生の課題は、地域それぞれの状況によって違うものの、地域再生に関する理念は共有できるだろう。

NPO かごしまルネッサンスは、共有する理念を通して、自立的、持続的な事業展開を通して、それぞれ生活する地域において貢献することを考えていきたい。